



心躍る
アートの旅に
でかけよう

【瀬戸内国際芸術祭2025 会期】

- 春会期 4/18(金)～5/25(日)
- 夏会期 8/1(金)～8/31(日)
- 秋会期 10/3(金)～11/9(日)

● 大巻伸嗣「Liminal Air - core -」
(高松港エリア/全会期)



● 草間彌生「赤かぼちゃ」2006年 直島・宮浦港緑地
写真/青地 大輔
(直島/全会期)



● ケイトリン・RC・ブラウン&ウェイン・ギャレット
「時間との対話」(作品イメージ)
(志度・津田エリア/夏会期)

二〇一〇年に始まり、三年に一度開かれる「瀬戸内国際芸術祭2025」は、今回で六回目を迎える。二〇二五年は春会期、夏会期、秋会期の三会期制で開催され、直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、高松港周辺など全十七エリアが舞台。三十七の国と地域から二百十八組のアーティストが参加し、過去最多となる二百五十六点の作品が展示されている。

今回の芸術祭では、夏会期にはさぬき市の志度・津田エリアや、東かがわ市の引田エリアが加わり、秋会期では宇多津エリアが参加する。瀬戸内の島々や港を舞台とする現代アートの祭典は回を重ねるごとに一層の広がりを見せている。

志度エリアでは、江戸時代の発明家・平賀源内ゆかりの地が舞台。平賀源内旧邸や平賀源内記念館にてインスタレーションが展開される。白砂青松の景勝地、津田の松原では「時間との対話」と題した、土地にインスパイアされた作品を展示予定。約三千本の黒松が並ぶ美しい海岸線と現代アートの融合は必見だ。

同じく夏会期の引田は、古くから陸上・海上交通の要衝として栄え、江戸時代には料亭や商家、旅館などが建ち並んだ町である。明治時代には手袋産業が始まり、現在も日本一の生産地として知られているが、芸術祭では「東かがわ手袋ギャラリー」を会場に、レオニート・チシコフ「みんなの手 月まで届く手袋を編もう!」のインスタレーションが展開される予定である。

これは地域住民が古着で手袋を編み、それを作品として展示するというユニークなアート。市役所内にボックスが設置され、作品制作に使用する古着を回収し細く裁断して糸玉にし、かぎ針編みで制作する。取材日に偶然にも、地域住民が集まって指先部分を作成しているところに遭遇した。アーティストと住民が協働することで、芸術祭は単なる展示の場ではなく、人々の対話と共創の場として機能している。

瀬戸内国際芸術祭2025

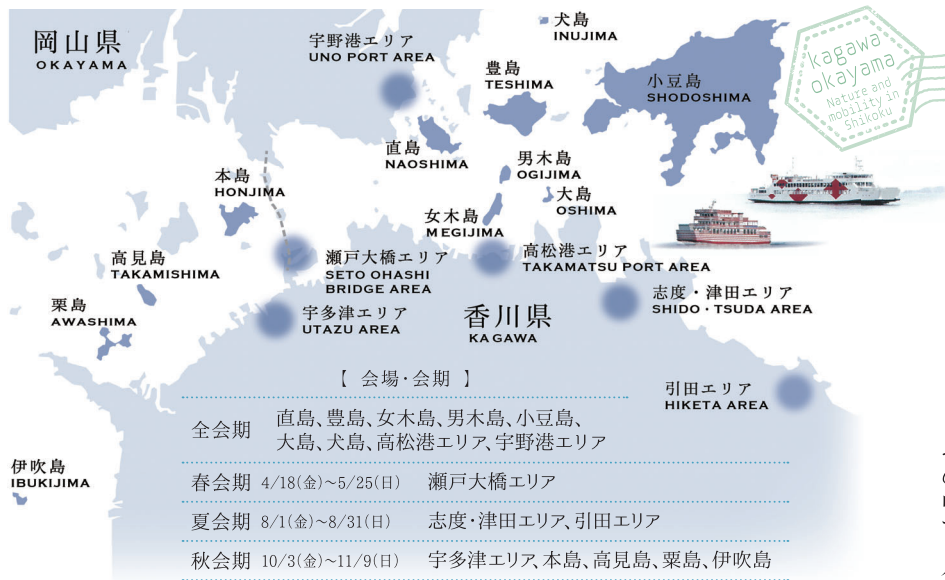
香川県・岡山県



● レオニート・チシコフ
「みんなの手 月まで届く手袋を編もう!」
(作品イメージ)
(引田エリア/夏会期)



古着を裁断して糸玉にし、作品となる大きな手袋を編むワークショップが開催されていた。



【 会場・会期 】	
全会期	直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港エリア、宇野港エリア
春会期	4/18(金)～5/25(日) 瀬戸大橋エリア
夏会期	8/1(金)～8/31(日) 志度・津田エリア、引田エリア
秋会期	10/3(金)～11/9(日) 宇多津エリア、本島、高見島、栗島、伊吹島

瀬戸内国際芸術祭2025公式アプリ



主要スポットへの経路検索や作品情報のほか、会場の混雑状況をリアルタイムで知ることができる。また、「作品鑑賞パスポート」もアプリから購入可能。会期中、芸術祭の参加作品(施設)を各1回鑑賞でき、パスポート1枚で有料作品のほとんどが鑑賞可能となる。(一部、別料金の作品や美術館等あり)

詳細は瀬戸内国際芸術祭2025公式ウェブサイト <https://setouchi-artfest.jp/>



●塩田千春「線の記憶」Photo:Shintaro Miyawaki (豊島/全会期)



●寛康明「Echoes as Air Flows」(作品イメージ) (志度・津田エリア/夏会期)

このように、瀬戸内国際芸術祭の最大の特徴は、鑑賞することにとどまらず、人がアートに積極的に関わることにある。島に滞在して運営を支えるボランティアサポーター「こえび隊」の存在も大きい。作品制作・メンテナンス、作品受付など、彼らの活動は地域外の人々が島の暮らしに関わるきっかけとなり、島民と緩やかな繋がりを保つ役割を担う。二〇〇九年に発足して以来、国内外からのべ四十万人以上が参加しているそうだ。

芸術祭の背景には、過疎化や高齢化が進む瀬戸内の島々の再生という目的がある。かつて高松港は宇高連絡船の四国側の拠点として賑わったが、瀬戸大橋の開通によってその役割を失いつつあった。香川県は高松港に新たな機能を持たせ、島々との航路を活性化させるために芸術祭を企画する。当時すでに直島ではアートを目的に訪れる人々が増えており、アートが人の移動や交流を生み出す可能性に注目が集まっていた。

その中でも象徴的な存在となっているのが豊島だ。かつては産業廃棄物の不法投棄による深刻な環境汚染に苦しみ、「ごみの島」と呼ばれていた。

た暗い過去がある。しかし、住民の努力によって現状回復が進み、瀬戸内国際芸術祭の舞台となったことで、アートによる地域再生が実現した。豊かな自然と歴史が再評価され、多くの来訪者を集めるようになった豊島は、負の遺産から誇りある島へと生まれ変わった。

瀬戸内海は古来より人々の暮らしや文化を育んできた。奈良・平安時代には朝廷との物流拠点として、戦国期には海上権を握る戦略地として、近代には製塩や造船の産業で栄えた。しかし時代とともに人口は減少し、かつてのにぎわいを見せた集落や港は静けさを増していった。芸術祭は、そうした失われつつある地域の記憶に光を当てる文化的営みとして、大きな意味を持つている。

この芸術祭は、観光消費型のアートイベントとは一線を画す。瀬戸内海という時間が積み重なった海域を舞台に、土地の歴史や人々との出会いを通して、鑑賞者自身が世界との関わり方を再発見する装置となっている。アートを前にした私たちもまた、島々を旅しながら、自らの記憶や価値観と向き合うことになる。それこそが瀬戸内国際芸術祭の最大の魅力であり、現代を生きる私たちに必要な想像力の源なのかもしれない。

